# 向き合う　中尾先生を偲んで

杉 崎　千 洋

中尾先生と、こんなに早く、お別れしなければならないとは、思ってもいませんでした。

中尾先生が、社会福祉学担当教員として本学に赴任されたのは、2005 年 10 月でした。その１年半前に、福祉社会コースが、教育学部から移設し、法文学部での基盤づくりをしているときでした。福祉社会教室のこれからの方向を発想し、実行していただける人材として、一同、大きな期待とともにお迎えいたしました。

赴任後は、教室内はもとより、学部・学科、地域、学会などでご活躍されました。学生への教育にかかわるエピソードをご紹介させていただきます。

赴任当初から、講義やゼミなどで、「根拠にもとづくソーシャルワーク」を強調されていました。学生には、「自ら実証できる社会福祉専門職」となるべく、調査・研究方法の教授にも時間を割かれていました。また、学生の長所を把握され、一人ひとりにあった指導をいつも心がけていらっしゃいました。赴任されてそれほどたっていない頃の会話の中で、学生の状況を実に的確につかまれていることに驚かされました。

学生思いの姿勢は、最期まで同じでした。入院中に数回お電話させていただきましたが、病状がすぐれないときに「学生に迷惑をかけたくない」としきりにおっしゃっていました。お亡くなりになる何時間か前に、ご家族から学生の試験の採点表をいただきました。その日の夜、どんな状態で採点されたのかを思い、心が苦しくなりました。

先生は、こうした姿勢を、ずっと貫かれていたのだと思います。話は前後しますが、先生とはじめてお会いしたのは、1999 年でした。本学に福祉社会コースが開設され、私はそれと同時に赴任しましたが、それからすぐのことでした。先生は、当時、松江市の福祉協力員をされていらっしゃいました。福祉協力員は、住民の立場から、地域の福祉活動を担う方々です。地域のご高齢や障害のある方たちと真摯に向き合われ、生活上の課題を丹念に聞き取り、支援されていました。それに留まらず、それらの方々の状況を、近隣の方々や行政、専門職がリアルにつかめるように、レポートされ、サービス開発につなげていこうとされていました。

本学でお仕事をされた期間は長くはありませんでしたが、先生が学生や教職員、地域の方々に向けられたお気持ちは、私たちの心に、ずっと、ずっと、残ることでしょう。先生、ありがとうございました。安らかにお眠りくださいませ。